

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.38 (Apr. 2019)



蒜山高原での茅刈り（岡山県真庭市／増井大樹氏提供）

草原自治体ネット総会と草原 100 選への取り組み

第 3 回全国草原の里市町村連絡協議会総会と環境省への表敬訪問

笹岡達男（ネットワーク理事）

2019年3月19日（火）に全国町村会館において、「全国草原の里市町村連絡協議会」（通称：草原自治体ネット）総会が開催されました。この草原自治体ネットは、これまでの全国草原サミット・シンポジウムの開催自治体あるいは参加自治体を中心となつて、全国の自治体が手をつなぎ情報を共有しながら、草原の利用・保全を核とした地域づくり等を進めることを目的に2016年11月15日に設立され、今回が第3回の総会になります。

総会には、会員自治体のほか、全国草原再生ネットワークからは高橋会長、山内理事、笹岡理事の3名と、環境省から岡野調整官、山本係長の2名が出席しました。2018年5月に宮崎県（串間市、川南町）で開かれた第12回サミットが盛会裡に終了したことを受けて、役員の変更が行われ、会長が宮崎県川南町の日高町長から、静岡県東伊豆町の太田町長にバトンタッチされました。同時に副会長には宮崎県串間市の島田市長が就任し、協議会の事務局も川南町から新会長お膝元の東伊豆町に移りました。

併せて太田町長（新会長）から、2020年9月に東伊豆町において第13回サミットを開催する旨の決意が表明されました。今後は、現地での実行委員会の組織などを経て、全国草原再生ネットワークも協力しながら、企画・準備が進められていくこととなります。

また、事業計画の一つとして、「草原の重要性と公



次回サミット開催地紹介（東伊豆町細野高原）

益的価値を広く国民にアピールしていくため、日本の風景『草原の里100選』の制定に向けた要望及び事業の実施」が掲げられ、草原自治体ネットが実施主体となつて、この100選事業を進めていくことが承認されました。この事業の具体化にあたっては、今後選考基準や選考組織の検討等が必要になります。さらに選定は、一度に100箇所選定するのではなく、全国サミットの開催ごとに順次選定していくという方向性も議論されました。当面は、次回の東伊豆町でのサミットで第1回の選定が実現するよう準備を進めていくことが課題となるでしょう。

これらの総会での決定事項等を踏まえ、総会終了後に日高前会長、太田新会長ほか10名で、環境省を表敬訪問し、勝又環境大臣政務官、正田自然環境

局長、鳥居大臣官房審議官（自然担当）にお会いして、次回（東伊豆町）サミット及び草原の里100選事業への協力を要請しました。

次期の重点課題となる両事業を成功させるためには、草原自治体ネット、全国草原再



左：高橋会長・山内副会長 中央：日高川南町長（草原自治体ネット前会長） 右：太田東伊豆町長（草原自治体ネット新会長）

生ネットワークの両者が核となって、関係官庁、団体、専門家等の協力・支援を受けながら進めることが肝心かと思われまます。今後とも関係の皆さまへの

周知も含め、会員各位のご協力をよろしくお願いいたします。



勝又環境大臣政務官（左から3人目）表敬



正田自然環境局長（中央）、鳥居審議官（右から3人目）表敬

各地からの報告

蒜山で「茅刈り」から「茅葺き」まで茅の活用を考える2日間～持続可能な集落づくり～を開催しました（野川崇：真庭市役所蒜山振興局）

2018年11月24日、25日に「茅刈り」から「茅葺き」まで茅の活用を考える2日間～持続可能な集落づくり～を蒜山で開催しました。真庭市蒜山地域は古くから山焼きが行われ草原景観が維持されている地域ですが、近年では集落の高齢化や担い手の不足などにより山焼きをする場所も減ってきており、それに伴い草原も減少しつつあります。また、住民が草原を利用することもなくなったため、草原を守る意義というものも見えづらくなっているという現状があります。しかしながら蒜山の草原という原風景は地域資源としての価値や種の保存法に指定されているフサヒゲルリカミキリといった希少種をはじめとする生き物の住処としても重要であり、なんとか草原を後世に残す必要があると考えていました。そこで今回、蒜山の草原で育つ茅を何かに利用できないか、さらには利用するだけでなくその魅力を多面的に伝え、多くの人に興味を持っていただき、蒜山の草原がこの先も維持される暮らしを作ることができないかという思いで、このイベントを開催しました。

初日（11月24日）は「蒜山高原の茅の活用に向けたフォーラム」と称して、まず、「草原を持続的に

維持するには？」というテーマで津黒いきものふれあいの里の雪江祥貴館長と北広島町芸北高原の自然館の主任学芸員、白川勝信氏の2名に講演をいただきました。雪江氏からは蒜山の草原の魅力や現在の蒜山山焼きをサポートするための組織づくり（山焼き隊）の紹介がありました。白川氏からは草原を維持する活動がSDGsと大きく関連していることや北広島町で実践している「茅プロジェクト」の話や雲月山の山焼きの取り組みなど、草原と学校教育のかかわり方やそれに伴い地域住民の参画も得られるようになった事例などを紹介いただきました。

次に「草原の資源を地域づくりにどう活かすか？」というテーマで、淡河かやぶき屋根保存会くさかんむりの相良育弥代表と社（やしろ）地域振興協議会の樋口基廣代表、福島県大内宿「大内宿結の会」吉村徳男顧問に講演をいただきました。相良氏は茅葺屋根の文化的景観的魅力について国内外の事例をもとに説明してくださり、日本建築だけでなく洋風建築や現代建築に合うような茅葺のスタイルがあることを教えてくださいました。樋口氏は蒜山の隣の地区の湯原地区にある社地域に残る風習や社寺について説明してくださり、特に大御堂という建物が現在

はトタン葺きになっているが将来的に蒜山の茅で葺き替えることを予定しているという話がありました。吉村氏からはかつてトタン葺きが多かった大内宿が今の姿になるまでのまきに吉村氏の半生についてお話をいただきました。地域の魅力として茅葺きがあり、それを残すために自ら茅葺職人となったことや、今でこそ有名な観光地である大内宿ですが、外から来る人向けの行事よりもまず地域の暮らしの楽しさを重要視しているという点が印象的でした。

フォーラムの最後には高橋佳孝氏に総合討論の司会をお願いしました。演者から得られた話をもとに、茅刈りや茅葺きというものを通して草原の利用先や管理の担い手を集落外にも広げ、あらたな持続可能な草原管理のしくみを進めていくことが大切であるというまとめをいただきました。

2日目(11月25日)は「茅葺き職人直伝!茅刈り・茅束ね」と称して、茅葺職人さんから茅刈り・茅束ねの方法を教わりました。参加者は4班に分かれ、それぞれ茅葺職人さんから手ほどきをうけながら、刈り方や束ね方のコツを学んでいきました。茅はただ刈って束ねただけではただの“ススキの束”で商品価値はなく、きちんと根元を揃えたり、ヤマハギなどの他の草があまり混ざらないようにするな

どの配慮をすることで茅葺業者さんに買ってもらえる“茅材”となるということを教わりました。参加者のみなさんも茅葺職人の指導の下、だんだんと茅の刈り方、束ね方が上手になっていき、きれいな茅の束をつくれるようになっていました。午後からは茅束ねコンテストが開催され審査委員長は茅葺文化協会の上野さんが行いました。上野さんは「どのチームも美しく束ねることができており、採点が難しかった」と講評していました。今回の茅刈イベントで茅刈りに興味をもたれた方が、将来の蒜山の茅刈りの担い手になれるように真庭市ではこの先も茅刈りに関するサポートを行っていきたいと考えています。そして将来的には蒜山の茅を使って地域の文化財の修復や、茅葺木住宅の復元、さらには茅の産地として近隣県にも茅を販売し、地域経済にとっても価値のある草原を作っていけたらと考えています。

最後になりましたが、本イベントに際し、全国草原再生ネットワークにはご後援をいただき、また会員の皆様に演者や参加者として蒜山に来ていただき大変ありがとうございました。この先も様々な取り組みを蒜山では行っていく予定です。興味のある方はぜひ春の火入れや夏の草刈りに遊びに来ていただければと思います。



三瓶山西の原の火入れ報告

(和田譲二：NPO 法人緑と水の連絡会議)

大田市の主催で 20 年以上にわたって継続している三瓶山西の原の 30 ヘクタールの野焼きが、昨年度の延焼事故につづき 2019 年にも延焼が生じてしまいました。20 年近くボランティアとしてジェットシューターを担いで現場の一線に参加している立場として、近年の段取りの悪さが気になっています。

大田市が主催なので市役所職員の動員とともに大田消防署が（訓練を兼ねて？）本格的に参加しています。近年気になっているのは実行主体の大田市と大田消防署との連携です。昨年の飛び火事故の反省を踏まえて、2019 年は南側の防火帯を放牧と草刈りで拵けておくほか、登山道沿いに広い防火帯を設け南北で区切りながら燃やすという計画となり、また各所に吹き流しを設置し風向きを確認するなどという諸対策が取られていました。それらはひとつの成果だと評価します。

しかし今回の飛び火延焼はまだ整備していなかった第 2 牧区の防火帯（北側区画）で起きました。当日の作業段取りのごく前半段階でした。すぐ近くに展開していた班で状況を見ていた私の見方としては、消防署がじゃんぱんポンプで水を撒いて防火帯を守ろうとしていた箇所が結果的に飛び火で越えられたという状況でした。そのすぐ手前のラインまでは大田市の指示でぎりぎり迎え火の着火が間に合っていたので飛び火が防げました。消防の水まきを待っていたせいで迎え火を着火できなかった箇所から飛び火が起きてしまったということです。野焼きには「放水」よりも「迎え火」が効果あることを端的に示したと思います。

例年であれば午前中に済ませられた区画が、延焼とその対応の県防災ヘリの散水を見守ったために作業時間が 1 時間以上ロスしてしまいました。午後はその残りの区画を燃やすことに決めたわけですが、午後の班展開でもいくつかの問題がありました。ボランティア班内には若手の班長以外に過去火引きを経験したベテランが数名おられますが、彼らにも過去の成功体験からみて、「着火が遅い」「迎え火を打たせる指示がない」など近年のやりかたへの批判がくすぶっていました。

具体例をあげておきます。当日の判断で燃やさないでおこうとされた第一牧区に隣接する草原区画とクロスントリーコースの間に私たちボランティア部隊が配備され待機していましたが、ようやく火が

来た段階でまたも強風となり、防火帯としいたクロスントリーコースの芝生を何度も火が超えようとしていました。そもそも外周から先に着火して迎え火を打つことができなければ防げた状況でしたが本部の指示はなく、風上から火の向くままにしている状況でした。ついに燃やさないでおくはずの区画に火が入りました。瞬時の判断です。ボランティア部隊に伴っていたジェットシューターをかかえた消防署の係員は安全第一の視点からかボランティアに逃げるように指示しましたが、ここだけは譲れず 10 数名のボランティアがジェットシューターで鎮火に入りなんとか成功させました。結果オーライということですが、もしここで見過ごしていたら確実に延焼し、その後ろの牧柵ラインに単独で配備されていた消防車両と部隊に昨年同様の被害が生じたことでしょう。

迎え火を打つタイミングは現場でしかわからないはずですが。その判断は大田市の指揮系統でなされなければなりません。消防署的には迎え火という概念はなく、水をまいて消すスタンスだけです。本来の実行主体の市役所では世代交代が進み、着火担当の若手職員は経験不足で指示待ちです。市役所の実行本部の指揮も世代交代があり似たようなものではないでしょうか。現場とのやりとりに時間がかかりすぎていて、しかも消防署の判断待ちなのですべてのタイミングが遅れてしまっています。遅れば遅れるだけ風向きが変わり草原の乾燥も進み危険度が増していきます。

野焼きの責任主体は「大田市」です。上手にきれいに「燃やす」のがミッションです。消防署の役割は作業後に「消火確認」でフォローに回るという従来の分担がいちばんよかったのではないのでしょうか。

ボランティア参加者からの提案です。

1. 類焼の防止のために、積極的に迎え火を活用しましょう。
2. 本部指揮も各班指揮も「役職・肩書」よりも、実際の野焼き経験年数（10 年以上とか）がある人の臨戦的な判断を優先するようにしましょう。なによりも人命を一刻を争う判断が求められる危険な作業なのでから。
3. 飛び火をした箇所の防火帯はイバラが多かったため、南側のようにしっかりと刈り込む。

全国草原リレー（第18回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第18回は、副会長でもある公益財団法人阿蘇グリーンストック

の山内氏に、阿蘇での最近の取り組みについて紹介して頂きます。

今 阿蘇の野草に熱視線！ （山内康二：公益財団法人阿蘇グリーンストック／ネットワーク副会長）

3月も下旬になり、そろそろ各地の草原でも春の野焼きが行われている(すでに終わったところもあるかも知れませんが)頃と思います。阿蘇でもつい先日約7,000haの一斉野焼きが行われました。

ところで、今 阿蘇では草原の野草に熱い視線が注がれています。1つはH28年の1月1日(元旦)の地元新聞の朝刊1面トップに大きく報道された野草堆肥の取り組みです。



阿蘇地域の草原に生えるススキなど野草の堆肥の中に、野菜の病気を抑え、肥えた土壌を作る善玉菌が大量に含まれていることが、佐賀大農学部の染谷孝教授(62)らの調査・研究で判明した。想像を超える善玉菌の高密度の存在に、土壌微生物学が専門の染谷教授らは注目し、さらに解析を進める。野草堆肥の活用が進めば減農薬や地下水保全に加え、採草面積の拡大で草原の再生につながる可能性があり、地元関係者の期待は膨らむ。 【3面に関連記事】

染谷佐賀大教授ら 調査・研究で判明

阿蘇地域では、刈り取ったススキやネギなどを野外に1〜2年置いた後、畑にまいたり、すき込んだりする。作物の根が張って病気になる、といわれてきた。農家が受け継いできたこの経験則を検証するため、県阿蘇地域振興局や

土壌中で抗菌効果

阿蘇の野草堆肥に善玉菌

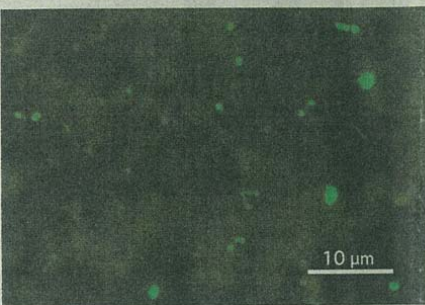


阿蘇草原再生

J A阿蘇、阿蘇草原再生協議会などが染谷教授に調査・研究を依頼。経験た。その結果、野草ロールに「拮抗菌」と呼ばれる善玉菌が、市場に流通する優良堆肥を上回る1%当たり数千個という高密度で存在することが分かった。拮抗菌は、土壌の中で病原菌を抑える抗生物質を作るといわれる。他の農家などのサンプルからも数百万〜数千万単位の拮抗菌が見つかった。

拮抗菌は主に2種類あった。50項目以上の菌の性質を調べた結果、一つは「枯草菌」の仲間のバチルス属かその類縁属に含まれるもの同一ではなく、阿蘇特有の新種の可能性が高い。もう一つは「放線菌」。病原菌を抑える力に加え、窒素やカリウムといった植物にとって重要な肥料成分を、土壌の中に保つ物質を作るとい

阿蘇市のトマト農家が使っている野草ロールの中の細菌(佐賀大農学部の染谷孝教授提供。単位μmはマイクロメートル) トマトを栽培するハウス内にまき野草ロール(阿蘇市)



界の生物の遺伝子配列情報を蓄積した「GenBank」で照合するなど詳細に遺伝子を解析。サンプルをさらに集めて病原菌を抑える仕組みや、どのような病原菌に有効なのかを分析する。阿蘇の野草堆肥に善玉菌が存在する要因を解明し、最も優れた野草堆肥の作り方、使い方の究明につなげる方針だ。(亀井宏二)

参考：平成28年1月1日 熊本日日新聞掲載記事

この報道以来、野草堆肥の野菜等の病害防止の有用性について改めて注目・確認され、地元農家の人達の草原再生オペレーター組合で生産されている野草ロールの販売が下表の通り年々増えており、品不足状態になってきています。

(堆肥用)	H28年度	H29年度	H30年度
採草面積	101.7ha	131.0ha	152.0ha
生産重量	305.970kg	344.580kg	436.980kg
生産個数	2,733個	2,707個	3,439個
(飼料用)	653個	658個	810個
(堆肥用)	1,684個	2,049個	2,629個

又、先日開催された佐賀大学の染谷先生による3年間に及ぶ野草堆肥の有用性研究の発表では、阿蘇地域に共通の阿蘇独特の拮抗金「阿蘇菌」の存在やその作物病害抑制のしくみ、よりベストな野草堆肥の作り方(野外で一度雨にぬらし、その後ブルーシートでおおい約半年腐熟させる)などがわかりやすく説明があり、地元農家やJA及び行政関係者など約70名の人々が熱心に研究成果の説明に聞き入って

いました。

又、染谷先生からは、ぜひ阿蘇以外の野草堆肥の有用性も調べて見たいので、出来れば各地の野草サンプルの提供をお願いしたいとのことでした。(秋吉台の野草サンプルは、すでに調査・分析しているとのこと)

もう一つは阿蘇の茅材商品化の取り組みです。

阿蘇地域世界農業遺産推進協会の助成を受けてグリーンストックが3年前から取り組んできた阿蘇の茅材の商品化・事業化の取り組みがいよいよ来年度より本格事業展開に入ることになってきました。

阿蘇地域の中での優良な茅材供給地の調査や牧野組合との協議、茅葺き職人さんなどの配送・買取り協議や茅材の試作品作りなどを行い、今年度地元牧野組合とボランティアさんとの協力の下、約3500束の製品を生産しました。

来年度は1万束程度(約700万円程度の売上になります)の生産を目標に取り組むことが出来そうです。(ちなみに1万束の生産で約35ha程度の野草地を刈り取ることになります) 今後地元牧野組合の参加が増えれば、2~3万束はいけるだろうと思われ



★染谷先生連絡先

(お問い合わせはお気軽にどうぞのことです)



茅束の出荷の様子

草原をめぐる動き (2019年1月～2019年4月)

- 4/2 扇山火まつり (場所: 大分県別府市扇山、連絡先: 別府八湯まつり実行委員会)
- 4/13 雲月山の山焼き (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/14 深入山山焼きまつり (場所: 広島県山県郡安芸太田町、連絡先: 安芸太田町商工観光課)
- 4/21 千町原保全活動 (場所: 広島県山県郡北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/25 蒜山の草原を守ろう(山焼きボランティア)(場所: 岡山県真庭市、連絡先: 津黒いきものふれあいの里)
- 4/28-29 春の風物詩・上ノ原茅場の野焼き (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 5月上旬 小清水原生花園 火入れ (場所: 北海道斜里郡小清水町、連絡先: 小清水町役場)
- 5/12 乙女高原の遊歩道づくり (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 5/12, 5/25 乙女高原のスマレ観察会 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 6/1 乙女高原自然観察交流会 黄色いスマレハイキング (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 6/30 マルハナバチ調べ隊 (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 7月中旬 防火帯刈り (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

訂正のお願い 先月の茅葺き文化協会様提供の原稿で、イベント案内の欄で、見えにくい箇所がありましたので、再度掲載いたします。

世界茅葺き会議 2019 日本大会について

- 5月18日(土) 国際茅葺きフォーラム「世界の茅葺き これからの茅葺き」(同時通訳付)
会場: 白川郷学園体育館 (岐阜県大野郡白川村鳩谷 614-1)
- 5月19日(日) 世界の茅葺き職人が合掌造りの屋根を葺く(結いの屋根葺きワークショップ)
場所: 白川村内
- 5月20日(月)～22日(水) 見学およびワークショップ
場所: 京都市内、京都府南丹市美山町、兵庫県神戸市

※国内参加者の募集は2月上旬を予定しています。(多数の希望者が予想されておりますので、開催地および当会会員優先で定員になり次第締め切ります。)

国際フォーラム参加者定員 450名(海外6カ国より150名、国内より300名)

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 38 2019年4月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】第3回全国草原の里市町村連絡協議会総会が開催され、第13回のサミット・シンポジウムが東伊豆で開催されること、草原の里100選を選定することが決定しました。100選については、以前のサミット宣言の中でもうたわれており、いよいよ実働が始まった感があります。選定にあたっては、会員のみなさまのご協力が不可欠と思います。素晴らしい100選になるよう、みなさまのご協力をお願いいたします。